

(A 5判 四三四頁 一九七八年三月
福武書店 五、〇〇〇円)
(田中誠二 山口大学講師)

大高順雄・福井秀加編著

Apocalypse Anglo-Normande
(Cambridge Trinity College
MS. R. 16. 2)

ノルマン征服も、征服に従事した支配者の子供ないし孫の世代ともなると、かれらの故郷との連絡が保たれていたとはいえず、独自のフランス語を話すようになった。これが本書のタイトルにみられる一フランス語方言、アングロ・ノルマン語である。この方言は、早くも一一一三年—一九年に書かれた韻文(『Computus 暦法』)を現存最古の文献としてもち、それ以降はば三百年間、大陸の純粋なフランス語とも、また自分達が支配している英国土着人の日常語中世英語ともことになった、独自の特徴をもった独立の文化を形成し、十二世紀中頃のGeffrei Gaimar, Lestorie des Engles や、十二世紀七十年代の Thomas, Tristan などの代表作をもってゐる。

本書の原本は、十三世紀中頃の英国で作成され、ヘンリー三世の王妃エレアノール・ドゥ・ブルヴァンスに捧げられたもので、十七世紀中頃その持ち主によりケンブリッジ大学のトリニティ・コレジに寄贈され、現在はその図書館に保管されている、アングロ・ノルマン語の、絵入りの黙示録である。新約聖書の黙示録を主題の中心とし、その前後にその作家と伝説上目されている聖ヨハネの生涯を配した、金箔をはった極彩色の細密画七一とその挿絵の間にアングロ・ノルマン語とその注釈を入れた、その当時の技術の粋を集めた豪華写本である。この写本の作成者の気配りも相当なもので、聖ヨハネの生涯の前半を若者として、その後半を鬚をたくわえた老人として描き分けるなど、本写本の水準の高さが偲ばれる。本書はこの写本を原寸よりはやや縮小した形で、色もそのままに再現したものである。金箔の部分など、はってあるかの如き美しい出来栄である。ややちいさくなったがため、挿絵中に在る本文の字が不明瞭になっているのが残念だが、それを補うべく、すこし資沢すぎるとも思われるが、わざわざ挿絵の略図を入れ、図中の本文の位置を

示しつつ転写するなど、編著者による行き届いた配慮がなれており、その欠を補っている。それに黙示録の本文とその注釈の転写もなされ、最後にその解説もついている。解説のなかには、挿絵の要約的な説明がつけられており、専門家でなくても、両者を照らしあわせてみるという労を惜しまなければ充分楽しめるようにできている。細密画も、かなりよく復原されており、原本の趣をよく伝えているように思われる。アングロ・ノルマン語というやや特殊な分野での高度な労作と評したい。歴史の史料としてはさして大きな意味を持つている訳ではないが、美術や宗教や言語の方面での価値は大きく、又当時の風俗を知る上においても役立つように思われる。

従来のが国の西欧学は、本書のごときパレオグラフィカルな研究は皆無に近かったといつてよい。実際専門家であっても、印刷された史料は読み、充分に利用しつつも、原史料がどのようなものであるのかを知らない場合が多い。やや小型にされたとはいえ、ほぼ完全な形で再現されたことは、大変よろこばしいことといわねばならぬ。

なお、やないなことはあるが、解説二四〇ページに不明瞭な点がみられるので指摘しておきたい。本書の現存の学寮トリニティ・コレッジの前身 Society of King's Scholars (一三二七年)、その後をうけた King's Hall (一三三七年)は、前者はエドワード二世、後者はその息子エドワード三世の建設になり、ヘンリー三世と王妃エレン・アノールとの関係からいえば、前者であれば孫、後者であれば曾孫とごうことになる。本文中の曾孫エドワード二世とごう記述はその意味で、不正確とさえよう。

(B5版 二五三頁 一九七七年十月
大手前女子学園フンダロノルマン研究所
一〇、〇〇〇円)
(鈴木利章 神戸市外国語大学助教授)

Jaroslav Folda

Crusader Manuscript Illumination at Saint-Jean d'Acre, 1275-1291

十字軍国家で制作された写本の彩飾についての研究は、一九五七年の H. Buchthal, *Miniature Painting in the Latin King-*

dom of Jerusalem を嚆矢とするが、その後 K. Weitzmann による一連のイコンに関する論文は別として、この主題についての研究はあまり進展しなかったようであり、本格的な研究書としては本書が Buchthal に次ぐものであろう。

表題にも見られる如く、本書はその考察対象をエルサレム王国末期のファコンに限定しており、西欧への影響も主としてそれとの関係で論じられている。第一章 Saint-Jean d'Acre as a Cultural Center of the Latin Kingdom in the Thirteenth Century は本書の序をなす部分であり、考察の前提として一三世紀ファコンの繁栄とその知的活動の概観を行ない、更に Buchthal 以来の所謂「ファコン派」を再確認する。次いで第二章 The Acre School ca. 1275-1280: The Leningrad-Lyon Master 及び Leningrad, M. E. Saltykov-Shchedrin State Public Library, MS. fr. fol. v. IV, 5 v. Lyon, Bibliothèque de la Ville, MS. 828 の分析を中心じ、Buchthal が不毛とした一二七〇年代のファコン派に彩飾写本の追加を行なう。

しかし著者が力点を置くのはファコン陥

落直前の一一年間であり、それは第三章 The Acre School ca. 1280-1285: The Advent of the Hospitaller Master と第四章 The Last Years of the Acre School: The Later Works of the Hospitaller Master and his Assistants じ扱われる。

この時期にファコンでの彩飾写本制作は最盛期を迎えたとするのが本書の主要な論旨の一つであり、それは著者が「Hospitaller Master」と名付ける画家の出現によりもたらされる。一二七六〜八〇年頃パリからファコンへ到来したとごうこの画家は本書の中心主題をなしており、彼とその弟子に帰せられる基本的にはフレンチ・ゴシックのスタイルを持つ一連の作品がファコンの工房で制作されたことにより、従来のファコン派像は修正され、更に多くの写本がそれに追加される。

つづいたファコン派が西欧に及ぼした影響については次の第五章 The Acre School and the West じ論じられ、そのじは Hospitaller Master の作風を媒介したものとごう「Brussels Master」なる画家とその工房が重視される。ファコン派の影響は、この Brussels Master の工房が活動し